KCI 公益財団法人京都服飾文化研究財団 広報誌

衣服の研究現場より

服をめぐる

一人一品 KCI設立40周年 特別寄稿

彬子女王殿下

「躓(つまず)く石も縁の端」

11

TAKE FREE

2018.11

KCI 40th Anniversary

表紙の収蔵品

ウィーン工房
室内着
（テキスタイル・デザイン：マティルデ・フレーグル）

1928年頃　レーベル：WIENER WERKSTÄTTE
オーストリア製　京都服飾文化研究財団所蔵　操上和美撮影

黒の絹羽二重に孔雀柄がプリントされたテキスタイル、「ホビー」は1916年から31年までウィーン工房に所属したマティルデ・フレーグルのデザインによるもの。平面的で素朴な孔雀柄が愛らしい。また尾羽根のデザインは若松文様を思わせ、キモノ・スリーブ、着物風の衿とともに、本品の日本趣味を強く印象づけている。工芸品製作所として1903年に設立されたウィーン工房では、家具やテーブルウエア、書籍などに加え、テキスタイルやファッションも数多く生み出された。

表紙のイラスト｜Ryuto Miyake

海外の古いフィールドガイドに影響を受けた作風で、書籍、広告などへイラストを提供するほか、グラフィックデザイナーとしても活動する。最近の仕事に『POPEYE（ニューヨーク特集）』や『デザインのひきだし』の表紙など。 www.ryutomiyake.com

服をめぐる 11

一人一品
KCI設立40周年　特別寄稿
彬子女王殿下
「躓（つまず）く石も縁の端」　p4

KCI Wunderkammer
スリーブ・パッド　p14

地産街道を行く⑪
［前編］ジュイ＝アン＝ジョザス（フランス）
トワル・ド・ジュイ（ジュイの布）　p16

今日の補修室　第11回
レプリカ（複製品）の製作②　p20

KCI 40周年特別企画
わたしが選ぶKCI名品　p22

KCI活動報告　p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団（KCI）が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団（KCI）とは

京都服飾文化研究財団（The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI）は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会（「モードのジャポニスム」展、「身体の夢」展、「FUTURE BEAUTY：日本ファッションの30年」展など）や、研究誌（『DRESSTUDY』、『Fashion Talks...』）の発行を通じて公開しています。
Website　http://www.kci.or.jp/

「華麗な革命」展 パリ装飾芸術美術館（1991-92年）©The Kyoto Costume Institute, photo by Naoya Hatakeyama

一人一品　ＫＣＩ設立40周年　特別寄稿

彬子女王殿下

Princess Akiko of Mikasa

著名人が各々の目を通し、ＫＣＩの収蔵品を語る「一人一品」。
今回はＫＣＩ設立40周年特別編として、三笠宮家の彬子女王殿下にエッセーをお寄せいただきました。

彬子女王殿下は、寛仁親王殿下の第一女子として、１９８１年にご誕生。学習院大学をご卒業後、オックスフォード大学に留学されました。イギリスでは海外に流出した日本美術の調査・研究にあたり、２０１０年、女性皇族として初めて博士号を取得されました。

現在はご公務の傍ら、京都産業大学日本文化研究所専任研究員、立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員など、国内の大学等でご研究を続けておられます。また、一般社団法人「心游舎」を設立し、子どもたちに日本文化を伝える活動にも積極的に取り組まれています。

今回、ＫＣＩ収蔵品からお選びになったのは、淡く軽やかな絹の生地が印象的な20世紀初頭のドレス。彬子女王殿下とこのドレスにまつわる不思議なご縁を文章にお寄せいただきました。

Princess Akiko of Mikasa

躓く石も縁の端

彬子女王

何気なく選んだドレスだったのだ。カタログのページをぱらぱらとめくるなかで、ふと目に留まった。こんなドレスなら今でも着られるかもしれないと思ったから。ただそれだけの理由。

明治150年にあたり開催された、「華ひらく皇室文化」展の図録に掲載される巻頭論文を書くことになった。私がテーマに選んだのは、明治から平成までの女性皇族の衣装の変遷について。もともとは、明治時代に海外に出たモノや人の研究をしていたので、明治時代の日本国内のことは門外漢である。その自分がこの分野で何か貢献できることはないかと考えたとき、頭に浮かんだのは、祖母である三笠宮妃殿下にお話をうかがってみることだった。

明治宮殿に参内されたご経験のある妃殿下のお話の中から、明治時代の皇室から変わらずにあるもの、あるいは変わったものについて、調査することができないかと思ったのである。

ローブ・デコルテやローブ・モンタント。現在でも私が宮中行事で着ることのある衣装たちについて、その成り立ちや変遷、どのような場で着られたのかを明らかにしていく作業はとても楽しかった。平安時代から変わらぬ装束を着続けてきた宮廷の人たちが、それを捨て、洋装に切り替えるという決断は、どれほど大きなものであっただろう。その宮廷の決断がきっかけとなり、洋装は徐々に日本の社会に広がっていくこととなる。この激動の時代の女性たちが身に着けたドレスとはどんなものであったのか。それを実際に見てみたくて、17世紀から現在までの様々な服飾関連の資料を収集、保管されているKCIに足を運んだのである。

スタディ・ルームに入った瞬間に、思わずため息がこぼれた。想像していた以上に美しいものだったのだ。ふらふらとドレスに近づき、見入ってしまう。そんな私に、学芸員の筒井さんが声をかけた。「このドレスは寺島伯爵家旧蔵のものなんです」と。

Princess Akiko of Mikasa

その言葉がパチンと脳内のスイッチを押した気がした。「寺島伯爵家って…もしかして、寺島宗則の関係のものですか？」とおそるおそる尋ねる私にすぐに返ってきたのは、「あ、さすがよくご存じですね。寺島宗則の息子の誠一郎の妻だった寺島きやうさんが着用していたものです」という筒井さんの朗らかな答えだった。

震えがきた。結局私はまわりまわってここに戻ってきてしまうのか。なんだかこの場所に来るのは運命だったような気さえしてくる。なぜならば、寺島宗則は、私が研究していた英国人日本絵画蒐集家、ウィリアム・アンダーソンをロンドンで見出し、海軍省のお雇い外国人医師として日本に送った人だったからである。

寺島宗則は、長崎で蘭方医学を学び、かの島津斉彬の侍医も務めた医師だった。明治維新後は、幕府の使節として二度渡欧した経験を生かして外交官となり、初代在英国日本公使、第4代外務卿を歴任したことで知られている。自身が医師であり、ロンドンに長期滞在した経験のある寺島がアンダーソンと巡り合ったのは、自然な流れであったのかもしれない。でも、寺島がアンダーソンを推薦して、日本に派遣しなければ、アンダーソンが日本絵画を蒐集すること

写真上
洋装姿の寺島きやう夫人
（明治末期）

写真下
寺島家の家族写真。
左から宗則夫人茂登子、恭子、
誠一郎、宗従、きやう
（明治44年）

（写真提供：寺島宗久氏）

Princess Akiko of Mikasa

はなく、私がアンダーソンのコレクションを研究することはなかった。明治期の在外の日本美術コレクションの研究をしていた私が、明治期の日本国内の研究に足を踏み入れていく過程で、寺島家ゆかりのドレスに出会ったのは、なんだかお導きであったように感じてしまうのである。

萌黄色の生地の上に、薔薇の刺繍が施された透け感のある絹を重ね、胸元にはかわいらしいコサージュがあしらわれたイヴニング・ドレス。ローブ・デコルテとして、夜会などで着用されたものだろうか。ハイ・ウエストのやわらかなシルエットのドレスは、面長で、目鼻立ちのはっきりしたきやう夫人に、よく似合ったことだろう。

寺島きやうは、旧財閥三井家の分家にあたる三井高辰の次女として、寺島家に嫁いだ。夫の誠一郎は、17歳で単身渡米。アメリカとフランスで政治や外交を学び、34歳で帰国。父のように外務省に勤めた後は、貴族院議員として活躍した。欧米での経験を活かし、内外の賓客の接待役を務めることが多かった誠一郎を、美しいドレスを着こなしたきやう夫人が支え、大いに活躍したという。このイヴニング・ドレスは、欧米製か日本製か明らかになってはいないが、欧米の貴婦人たちのドレスを数多く見てきたであろう誠一郎が、いろいろと助言をしたのだろうなと思うと、なんだか心がほっこりとあたたかくなるような気がする。

寺島きやうのイヴニング・ドレス。それは私にとって、明治の内と外を結び付けてくれるものだった。正直に言えば、「華ひらく皇室文化」展の巻頭論文を書くのは不安だった。明治期の皇室文化の研究を専門にしておられる方はたくさんいるし、浅い知識しかない私が巻頭論文なんておこがましいにも程があると思っていた。そんなもやもやを心の底に抱えていた中で出会ったこのドレスは、「いいじゃない、どちらの研究もすれば」と背中を押してくれているように思えた。

和装から洋装へ。今までの日本文化が劇的に変わった時代に、大きな決断をした明治の女性たちのように、私も研究者としての新たな一歩を踏み出してみることにする。

Princess Akiko of Mikasa

彬子女王殿下ご選出の一品

イヴニング・ドレス［寺島伯爵家旧蔵］

1908年頃・作者不詳
京都服飾文化研究財団所蔵　寺島宗從氏寄贈
左：林雅之撮影　下：成田舞撮影

白い絹ゴーズ地にバラの花や葉の刺繍を施している。胸元にコサージュ。白い絹レースのインサーションが前身頃中心やウエスト、袖口につく。ベースの生地はアクア・グリーンの絹ツイル。

ウエスト位置をやや高めにとり、肩から裾へと緩やかに続く筒型のシルエットは、欧米における1906年以降の流行を示している。これは1900年前後のアールヌーヴォー期にみられるウエストを極端に細くした砂時計型のシルエットとは大きく異なっていた。当時、日本人女性で洋装に身を包めたのはごく一部の階級のみで、本品のような高級なイヴニング・ドレスは入手し難いものだった。本品は短期間に移りゆく最新の流行が色濃く反映された稀少な作品といえる。

KCI WUNDERKAMMER

スリーブ・パッド

素材：綿、羽毛
原産地：ヨーロッパ
製作年：1830年代

ふかふかとした丸い物体。まるで蒸しあがった饅頭のようだ。これは1830年代の流行のドレスに見られる大きな袖を形作るためのパッドで、水中用のアームリングのように上腕に取り付ける。パッド側の紐とドレス側の紐を結んで装着してからドレスを着用した。当時の絵画やイラストに描かれた女性たちを見ると、妖精のようにふんわりと軽やかな装いをしている。ロマン主義全盛のヨーロッパで求められた理想的な女性像だ。しかし実際には袖周りにモソモソとした大きなパッドを付け、さぞ動きの邪魔になったことだろう。表に見えない苦労はいつの時代も同じ。（筒井）

下着類（スリーブ・パッド，コルセット，シュミーズ，ペティコート）を着装した様子

©The Kyoto Costume Institute,
photo by Takashi Hatakeyama

Le mercure des salons,1830

地産街道を行く⑪

［前編］ジュイ＝アン＝ジョザス（フランス）トワル・ド・ジュイ（ジュイの布）

KCIの収蔵品にみられる技法や素材、来歴を手がかりに、各地を訪れます。

上：「ヴェルサイユへの訪問者たち」展で展示されたKCIの収蔵品
下：華麗な門構えのヴェルサイユ宮殿は17世紀に建てられた（写真提供：内村理奈氏）

今回の手がかりとなる収蔵品

ドレス
（ローブ・ア・ラ・フランセーズ）
1775年（素材：1760年代）フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵　畠山崇撮影

本品は18世紀フランスの典型的な宮廷服「ローブ・ア・ラ・フランセーズ」。外側のローブ、胸当て部分のピエスデストマ（英：ストマッカー）、内側のスカートにあたるジュップ（英：ペティコート）の三部形式で構成される。本品にみられるアイヴォリーの絹カヌレ（横畝地）に絹ブロケードで花束と毛皮柄が織り出された精巧なテキスタイルは、フランスの高級絹織物の産地リヨンで作られたもの。18世紀のフランス宮廷では絹織物の着用が義務付けられ、豪華さが競われた。

王妃謁見のためのドレス

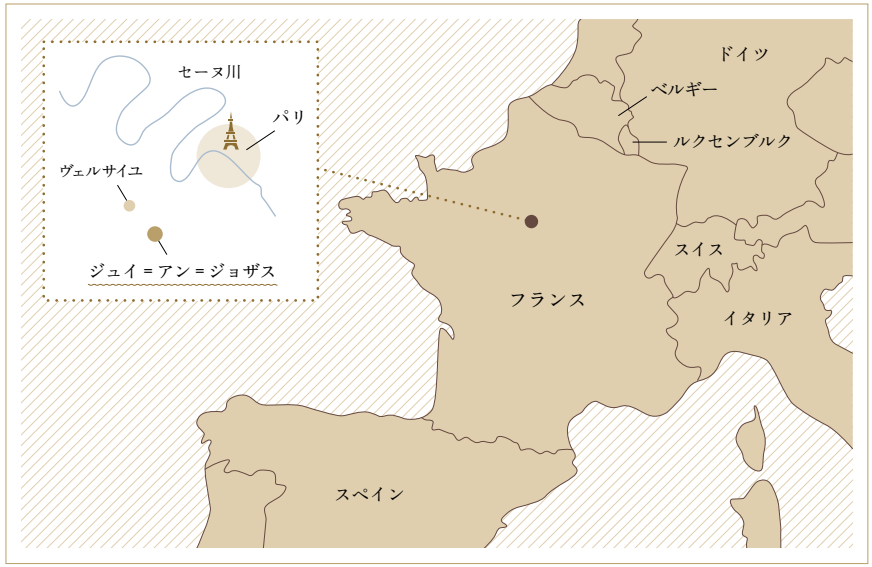
年間800万人が訪れる世界屈指の観光地、フランスのヴェルサイユ宮殿。今春、この豪華絢爛たる館に焦点を当てた展覧会「ヴェルサイユへの訪問者たち（Visitors to Versailles）」がニューヨークのメトロポリタン美術館で大々的に開催された。本展では、17世紀から18世紀末までにヴェルサイユ宮殿を訪れた人々にまつわる物品や、彼らが目にしたであろう宮殿の調度品、献上品や下賜品の数々が世界中の美術館から集められた。その出展品の見どころの一つが、KCIが所蔵する宮廷服（ローブ・ア・ラ・フランセーズ）だった。

1775年のある日。この豪奢な絹織物で仕立てたドレスに身を包んだある起業家の夫人、マリー＝ルイーズ・ペティノーが夫と共にヴェルサイユ宮殿へ上がったとされる。宮殿の女主人、王妃マリー・アントワネットに謁見するために。どのような用件で赴くに至ったかは定かではないが、マリー＝ルイーズ・ペティノーは緊張の面持ち

トワル・ド・ジュイ製の18世紀末のペティコート（部分）　京都服飾文化研究財団所蔵

クリストフ＝フィリップ・オーベルカンプ
［1738−1815］

ドイツ生まれのオーベルカンプは1774年、卸売商人の娘、マリー＝ルイーズ・ペティノーと結婚。1790年にはジュイ＝アン＝ジョザスの初代市長に選出された。



ヴェルサイユ近郊の街、ジュイ＝アン＝ジョ ザスはパリから電車で約 40 分に位置する。

グランティヌ城を改装したトワル・ド・ジュイ美術館。前庭には季節の花やハーブが植えられ美しく手入れされている。

訪問した美術館

トワル・ド・ジュイ美術館
Museé de la Toile de Jouy
54, rue Charles de Gaulle, 78350 Jouy-en -Josas
URL: http://www.museedelatoiledejouy.fr/

だったに違いない。なにしろ王妃とは身分がかけ離れている。しかしながら王妃と彼女はある服飾品を介して縁が結ばれていた。当時、ヨーロッパ各地で大流行していた綿布、トワル・ド・ジュイだ。

多彩かつ鮮やかなプリント綿布、トワル・ド・ジュイ

トワル・ド・ジュイとは木版や銅版によって動植物などのプリントが施された綿製の生地の総称で、18世紀中期にヴェルサイユ近郊の小さな街、ジュイ＝アン＝ジョザスで興ったことにより、こう呼ばれるようになった。この生地の魅力は、多彩かつ鮮やかなプリントの文様、そして綿布の薄さと丈夫さにあり、プリント工場が設立された当初はわずか5名だった従業員が、19世紀初頭の最盛期には1300人以上になるまでに成長したというのだから、その隆盛ぶりがうかがえる。王妃マリー・アントワネットはこのトワル・ド・ジュイをことのほか気に入り、様々なドレスに仕立てたという。そして、この工場をジュイ＝アン＝ジョザスに設立した人こそ、マリー＝ルイーズ・ペティノーの夫、クリストフ＝フィリップ・オーベルカンプだったのだ。王妃はオーベルカンプ夫妻との会見で、自分好みの図柄をあれこれ伝えたのかもしれない。想像が膨らむ。

現在、トワル・ド・ジュイについての全貌は、フランスにある「トワル・ド・ジュイ美術館」で知ることができる。今年の晩夏、同館を訪れる機会をえた。

パリから電車で南西に約40分、ヴェルサイユ宮殿からは直線距離で4kmほど南東に位置するジュイ＝アン＝ジョザスは、緑豊かな静かな街だ。小さな家々が並ぶ集落の外れに、かつてのグランティヌ城を改装した美しい館「トワル・ド・ジュイ美術館」が佇む。ここには現在、生地見本や版木など7000点が収蔵されており、工場の創業時から繁栄時、そして終焉までの過程が時代を追って紹介されている。

ドイツ人プリント技師オーベルカンプ、ジュイ＝アン＝ジョザスへ

オーベルカンプがこの地で工場を創設したのは1760年。代々、ドイツでプリント業を営んでいたオーベルカンプは、フランスからプリント産業再興の命を受け、ヴェルサイユにほど近いこの地にたどり着いた。というのも、17世紀初頭から続くインド原産のプリント綿布「インド更紗」の大流行を受け、フランスは自国の絹や麻、毛織物産業を守るために17世紀末から18世紀半ばまでインド更紗の輸入および模造の生産、着用の禁止令を出すまでになったが、そのせいでフランスのプリント技術は各国に遅れをとっていた。そこでオーベルカンプに白羽の矢がたったのだった。このときオーベルカンプは弱冠22歳。かくして、トワル・ド・ジュイの歴史の幕が開かれた。（次号へ続く）

取材文・写真　筒井直子

今日の補修室

TODAY'S RESTORATION ROOM

第11回

レプリカ（複製品）の製作②

みんなで手分けして、
大急ぎで作り上げました

前号に続き、服飾品のレプリカ（複製品）製作をご紹介します。今回取り上げるのは、KCIが所蔵する1775年頃のコルセットのレプリカ製作です。コルセットとは体のラインを補正しドレスのシルエットを形成するための下着です。18世紀のコルセットには体に添わせるために細いボーン（骨組）が複数内蔵されていました。

本品は、1989年の「華麗な革命」展（主催：京都国立近代美術館、KCI）でマネキンに着せつけて展示するために作られました。当初はオリジナルのコルセットを着装する予定だったのですが、コルセットの生地や刺繍糸の劣化が激しいため二ヶ月間の展示には耐えられないと判断し、展覧会のわずか二ヶ月前にレプリカ製作が決定されました。当時KCIではすでにレプリカ製作を行っていましたが、あくまでオリジナルのドレスを補うための小物や下着類の製作だったので、レプリカを展示の主役として使うのは新たな挑戦でした。

オリジナルのコルセットには鯨の髭がボーンとして使用されており、本品に挿入されている鯨の髭は全部で162本に及びます。レプリカでは鯨の髭に代わる素材としてABS樹脂を採用しました。表地には、染色工場でオリジナルに近い色に染めてもらった綿サテンを使用しました。

「華麗な革命」展は京都の後ニューヨーク、パリと3都市を巡回しましたが、マネキンにはレプリカを着せつけ、オリジナルは負荷がかからないよう平置きで展示することができました。（谷智恵美）

「華麗な革命」展パリ会場の展示風景。マネキンにはレプリカを着せつけた。畠山直哉 撮影

オリジナル

レプリカのもととなったオリジナルのコルセット。本品は、鯨の髭、籐、鉄、綿サテン、麻布から成る。

レプリカ

裁断図

ミシン針であけた穴を目打ちでさらに大きくしている様子。

裏を覆う前の状態。

レプリカ製作の手順（全て手縫い）

1. オリジナルから正確なパターン（ドレス製作用設計図）を採り裁断図を作成する。表地（綿サテン）、麻芯、ABS樹脂を裁断する。
2. 樹脂に縫い針を入れやすくするためまずミシンにかけて穴をあけ、その穴を目打ちでさらに大きくしておく。
3. 表地（綿サテン）、芯地（麻芯）、ボーン（ABS樹脂）、裏地（ダック芯）の順で生地を合わせ1セットとし、2であけた穴を使いながら本返し縫いで留めていく。
4. 各ピースを巻き縫いで接ぎ合わせる。この時前後中央のボーンには竹（オリジナルの素材は籐）を挿入し、前中央裾には先端部を成形するため木片を挿入する。各接ぎ線はオリジナルに似せ市松柄刺繍を施した綿テープで覆い留める。
5. ステンレスのワイヤーを使って胸のカーブを成形する。（オリジナルの素材は鉄）
6. 肩ひもを付け、後ろ中央には紐通し用穴（アイレット）をかがる。裏全体をダック芯で覆ったら完成！

KCI40th Anniversary

KCI40周年特別企画

わたしが選ぶKCI名品

今年設立40周年を迎えたKCI。それを記念して、KCIとゆかりの深いキュレーターや研究者の方にKCI収蔵品から「これぞ名品！」と思うものを一作品選出いただき、お話をうかがいます。第二回は、ファッション研究者でKCIでのキュレーター経験もおもちの蘆田裕史さん（京都精華大学）にインタビューしました。

マッカーデルはアメリカで活躍したデザイナーです。本品にアメリカというお国柄や、時代がどう反映されていますか？

1940年代のアメリカは、第二次世界大戦の影響で人手不足になり、それまでお手伝いさんがやっていたような家事を、家庭の主婦がこなすようになりました。そして、そういう女性のために、おしゃれで、動きやすく、かつ安価な服を供給することが求められました。マッカーデルはこの問題をデザインを通して解決しようとした一人と考えることができます。

なぜこの作品を選ばれたのですか？

クレア・マッカーデル［1905-1958］は一般的に名の知れたデザイナーではありませんが、「日常着」について考える際、とても参考になるデザイナーだと考えています。ですから、とりわけデザイナーを目指して勉強している人、あるいはすでにデザイナーとして活動している人にマッカーデルを知ってもらって、「日常着」について考えてもらいたいと思い、この作品を選びました。

現在、マッカーデルの自伝『What Shall I Wear?』の翻訳企画が進んでいるとお聞きしました(※)。なぜ今、彼女が注目されているのでしょうか？

はっきりした理由はわかりません。ですが、マッカーデルに興味を持つ編集者さんが複数いらっしゃるのは事実です。社会が変わっていくにつれファッションやファッションデザインの在り方も変わっているのに、それを取り巻く教育やメディアが古い体質のままです。私は、この両者間の断絶が大きな問題であると思っているのですが、もしかしたら編集者さんも、マッカーデルを見直すことでこの問題に対する解決の糸口が見つかるかもしれない、と感じているのかもしれません。

彼女は服作りにあたって、流行、量産、着心地などのバランスをどう取っていたのでしょうか？

マッカーデルは、自分が思い描いたデザインや着心地を安価な素材でいかに成立させるかを常に考えていた人でした。本人も「生地を選ぶ時にいつも値段のことを考える」と言っており、自分の服がお客さんの手の届かない値段になってしまわないよう、コストについてはシビアだったようです。それは、彼女の服が富裕層向けではなく、一般大衆向けだったからでしょう。そして、当時のパリの流行をきちんと理解していながら、それを積極的に自分の服に取り入れることはしませんでした。アメリカにはアメリカにふさわしいスタイルがあり、パリの華やかな流行服は似つかわしくないからです。

蘆田さんが選んだ KCI名品

クレア・マッカーデル

デイ・ドレス 1948年頃

レーベル：claire mccardell clothes by townley
京都服飾文化研究財団所蔵　畠山崇撮影

アメリカ生まれのクレア・マッカーデル［1905-58］は、パーソンズ・デザイン学校を卒業後、ニューヨークの既製服会社タウンリー・フロック社のデザイナーとなり、後に自らのレーベルで服作りを行った。本品は第二次世界大戦直後のディオールのニュールック（1947年）のようなシルエットであるが、ディオールのようにボーンやチュールなどの内部構造を用いず、張りのある木綿平織の生地とギャザー等を駆使した縫製技術によって明瞭な形を作り出している。デニムやギンガム、ジャージーといった日常的な素材を多用したマッカーデルの服には、着やすさと優雅さが融合しており、アメリカの女性達から広く支持された。

今は大学で教鞭をとっておられます。マッカーデルから学生に何を学んでもらいたいと思いますか？

現在、自己表現を最大限に押し出した先鋭的なデザインをすればするほど、ファッションの世界での評価が高くなる傾向があります。しかし、マッカーデルはそれとはまったく反対のことをやりました。マッカーデルのような、ファッションデザインを自己表現ではなく、着る人のためのデザインとして突き詰めた人がいたということを、学生の皆さんには知ってもらいたいと思います。

蘆田裕史　Hiroshi Ashida

京都精華大学ポピュラーカルチャー学部講師。共著に『ファッションは語りはじめた――現代日本のファッション批評』（フィルムアート社、2011年）、『1990年代論』（河出書房新社、2017年）、主な論考に「言葉と衣服」（『新潮』113巻6、9、12号、2016年）など。ファッションの批評誌『vanitas』の編集や、本と服の店「コトバトフク」の運営にも携わる。

※クレア・マッカーデルの自伝『わたしの服の見つけかた』（翻訳：矢田明美子 解説：蘆田裕史 出版：アダチプレス）が2018年11月21日に発売されました。
詳しくは http://adachipress.jp/clairemccardell/

KCI活動報告

展覧会開催

「Kimono Refashioned」展
ニューアーク美術館にてオープン

京都服飾文化研究財団の新しい展覧会「Kimono Refashioned」展が、10月13日、米国ニュージャージー州のニューアーク美術館にてオープンしました。本展は19世紀後半から現代まで、きものがファッションにどのような影響を与えたのかを探る展覧会。米国の美術館が所蔵する浮世絵や、兜、蒔絵などの日本の工芸品とともに、KCIコレクションの衣装45点が展示されています。オープニングセレモニーにはたくさんの方が詰めかけ、本展覧会に大きな関心が寄せられました。展覧会は2019年1月6日までニューアーク美術館で開催され、その後、サンフランシスコ・アジア美術館、シンシナティ美術館に巡回します。

Kimono Refashioned, Newark Museum, ©Mike Peters.

KCIギャラリー展示

「収蔵品紹介28：なんとなく、スーツ。：「型」と遊ぶ」

会期：2018年9月25日（火）～12月21日（金）（土・日・祝日休館）
開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は4時30分まで）
入場料：無料

京都服飾文化研究財団が所蔵する服飾コレクションを展示するKCIギャラリーでは、現在、「なんとなく、スーツ。：「型」と遊ぶ」と題して、KCI収蔵品から選りすぐった20世紀初頭から現代までの男女のスーツ12点を展示しています。現代社会のあらゆる場面で登場し、特に働く人々にとって欠かすことのできないスーツ。スーツは「型」があるからこそ、デザインやスタイルの小さな違いを楽しむことができるアイテムです。「型」を守りつつも、様々な色・デザイン・素材の違いでおしゃれを楽しむスーツの世界を是非ご覧ください。

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より　第11号
2018年11月29日発行（年3回発行）
-
発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団（KCI）
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
株式会社ワコール京都ビル内
電話：075-321-9221
ウェブサイト：http://www.kci.or.jp/
編集：筒井直子、福嶋英城、松坂雅子（京都服飾文化研究財団）
デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子（Neki inc.）
写真：成田舞（Neki inc.）、筒井直子（京都服飾文化研究財団）

編集後記

KCIが設立されて今年で40年が経ちました。その間、コツコツと作品の収集や補修作業、研究を積み重ね、今日では世界中のどこかの美術館で毎年のように展覧会を開催し、皆さまにKCIの活動の成果をご覧いただいております。この節目の年を迎え、これからも皆さまに服飾文化の豊かさや面白みをお伝えすべく真摯に取り組む決意を新たにいたしました。本誌ともども、今後のさらなる活動にどうぞご期待ください。